

# 1はじめに

- ノンコンプライアンスの理由の中には「きちんと服用していたのだが、都合で来局(通院)できなかった」というものもある。高齢者においては「家族が忙しくて連れてきてもらえなかった」という人もいる。そのような患者さんたちにとって長期投与化はどんな福音となったのだろうか。
- 今回、我々は平成14年4月以降に長期投与となった患者さんを対象に、コンプライアンスの変化を多方面から比較検討してみたので報告する。



# 2実施方法－1

## ①施設



茨城県

たけの調剤薬局(結城郡八千代町)



たけの薬局下妻店(下妻市)

## ② 対象患者

平成14年4月以降に長期投与となった患者さん271例を対象とした

※長期投与は2回連続で15日以上処方があった場合に開始と判断した

## 2実施方法－2

### ③除外基準

前後1年以上のコンプライアンスをできるだけ正確に求めるため  
下記項目に該当する症例は除外した

- 1) 長期投与になる前の服薬期間が1年に満たない
- 2) 長期投与になった後の服薬期間が1年に満たない
- 3) 2ヶ月以上の休薬期間がある
- 4) 症状により服用しない可能性のある薬剤のみを服用している  
(痛み止め、胃薬など)
- 5) 継続中の処方了他医療機関・薬局などでもらった

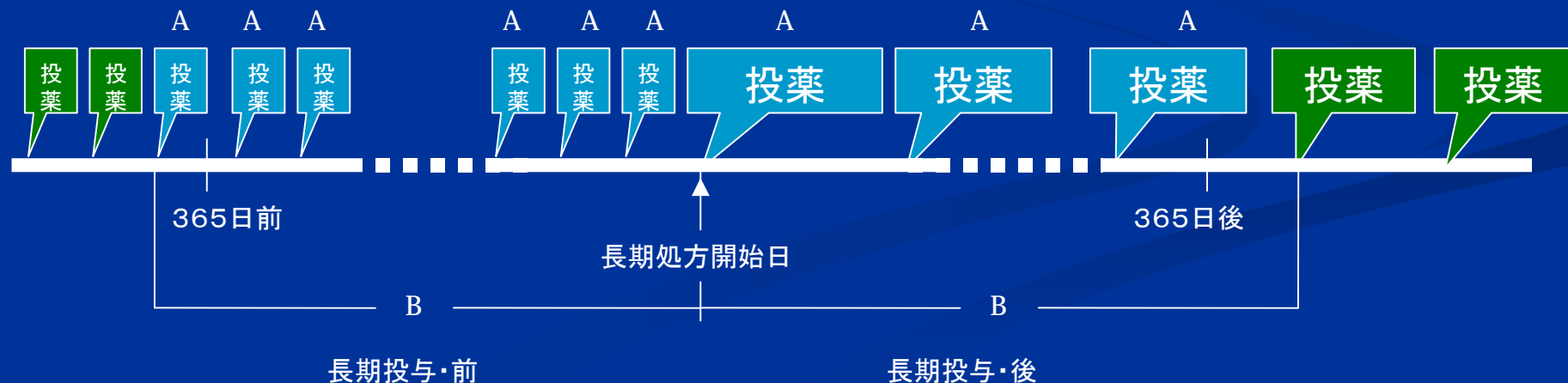
112例を除外した残りの159例を比較検討した

# 2実施方法－3

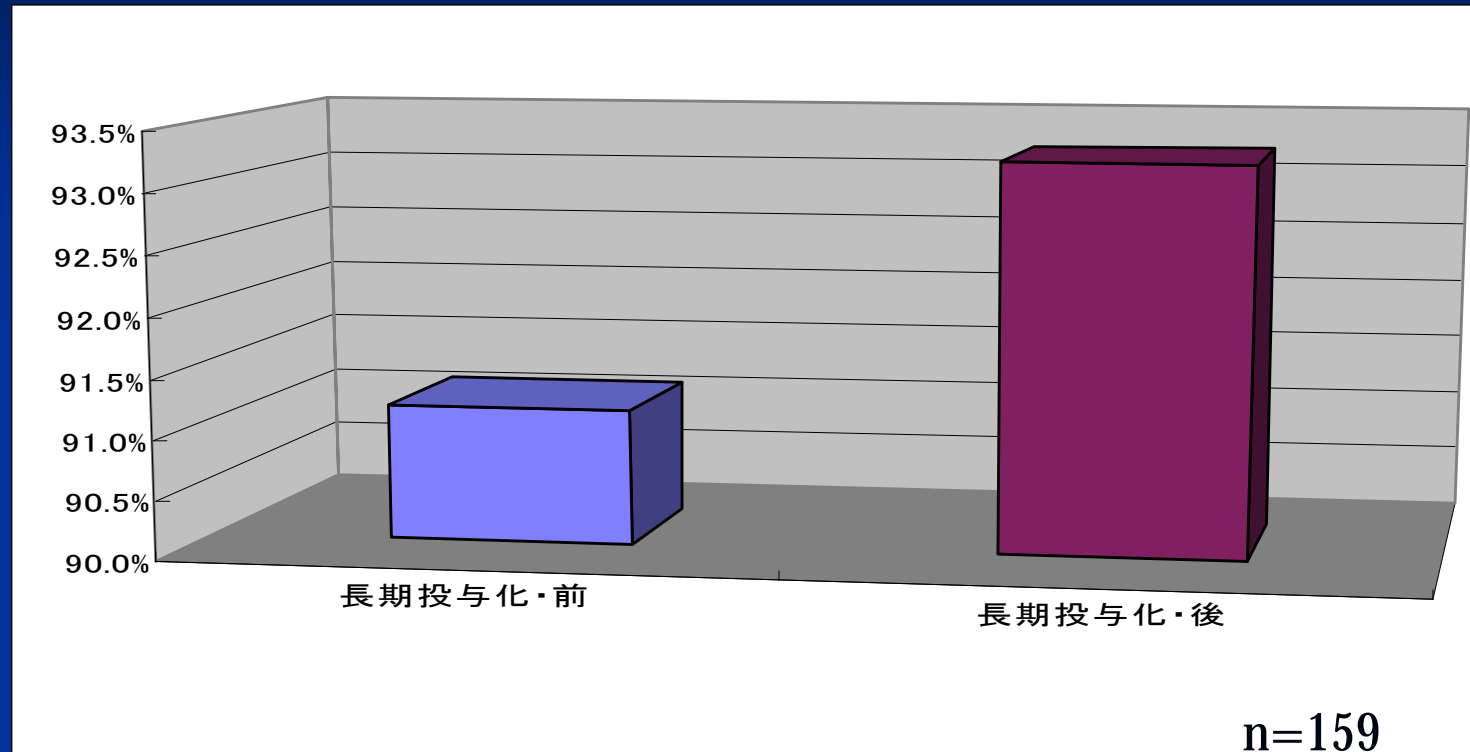
## ④コンプライアンス(服薬率)の求め方

コンプライアンス(%)

$$= \frac{\text{期間内に投与された対象薬剤の処方日数(A)の合計}}{\text{投与された対象薬剤を服用するのにかかった総日数(B)}} \times 100$$

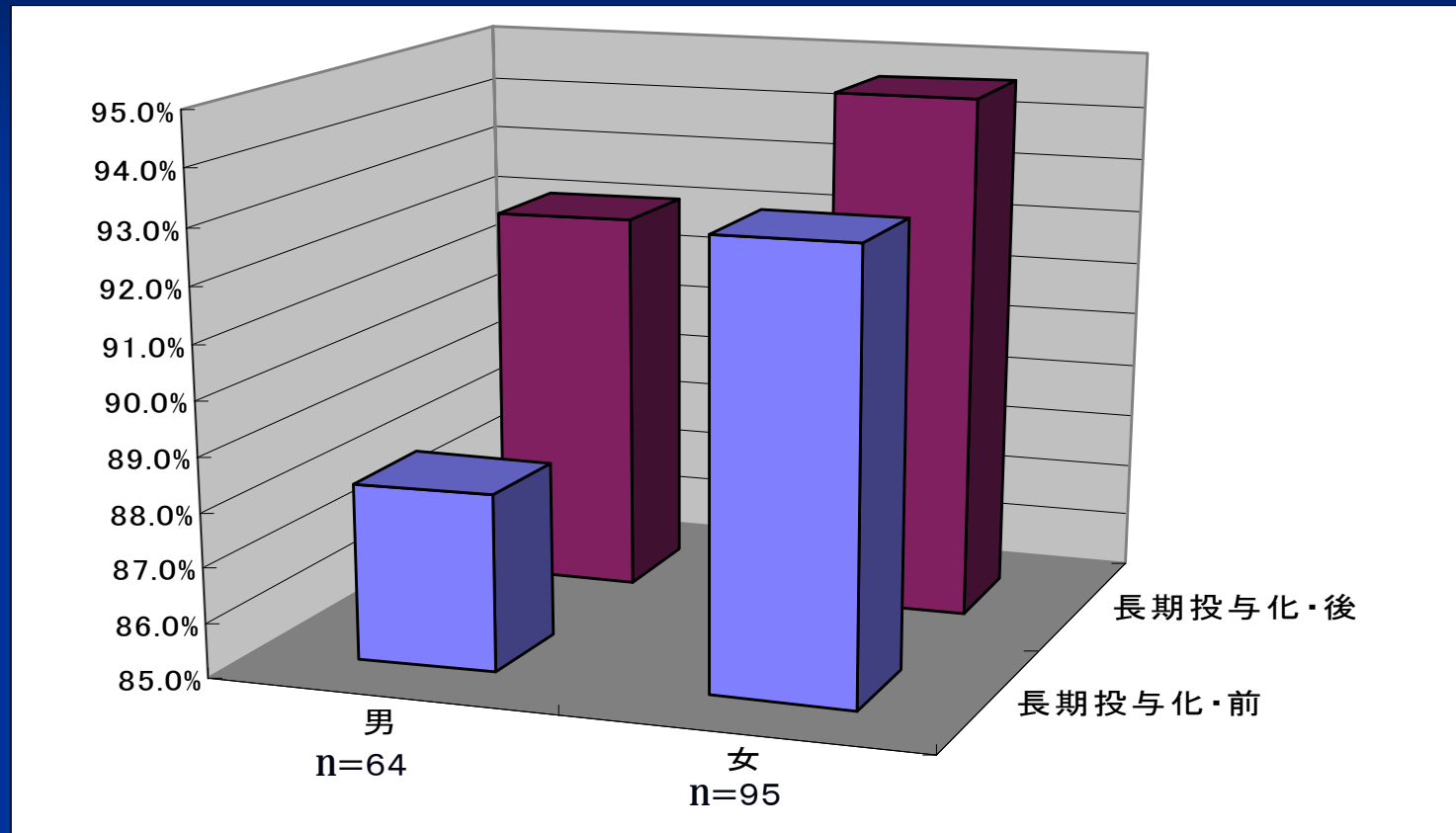


### 3 結果－1 全症例平均



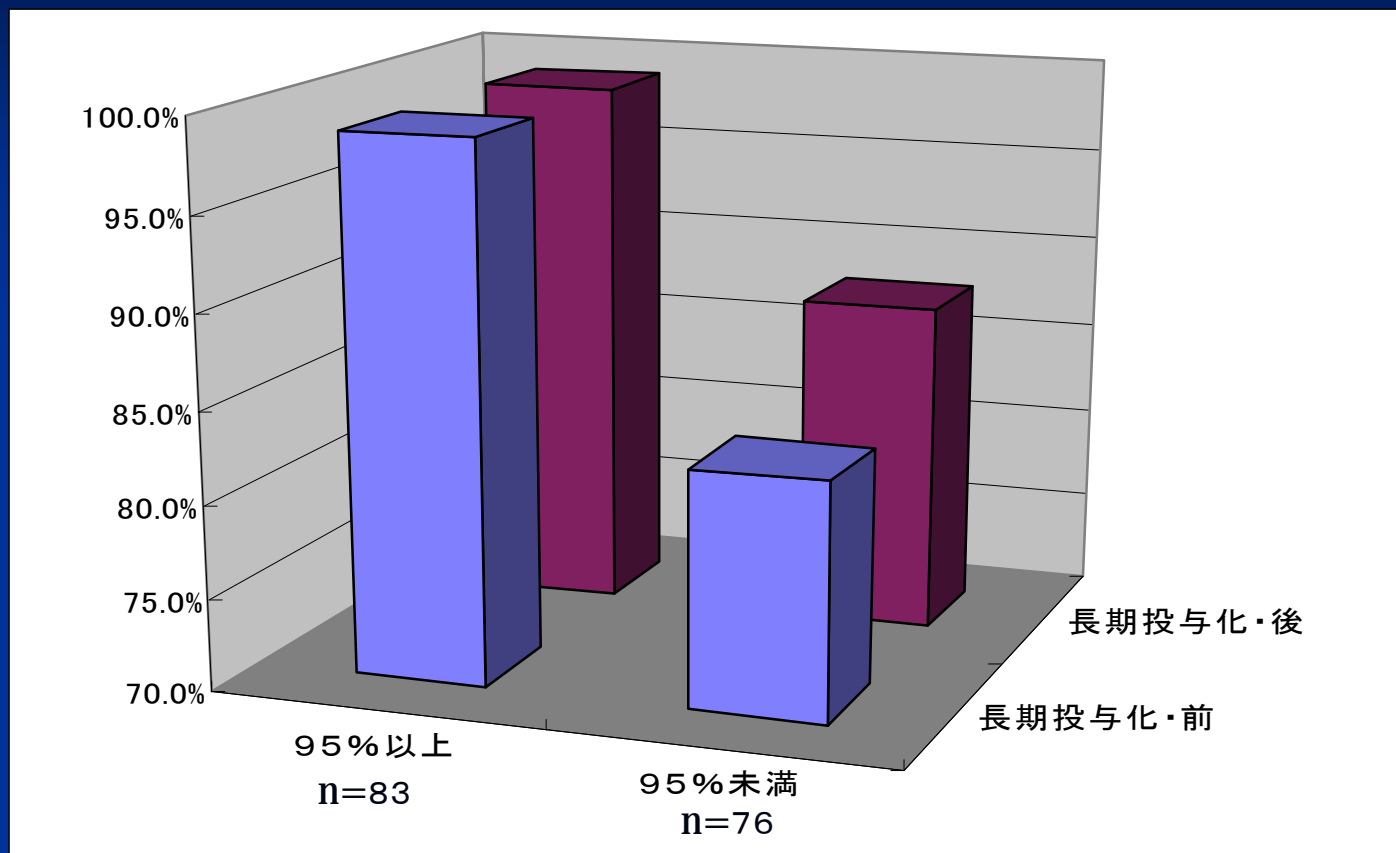
- 2年以上継続服用している症例が対象になっていることや投与回数が少ないものを対象薬剤として優先したことにより、もともとのコンプライアンスはかなり高い値を示す
- それにもかかわらずコンプライアンスは2.1%向上している

### 3 結果-2 男女差



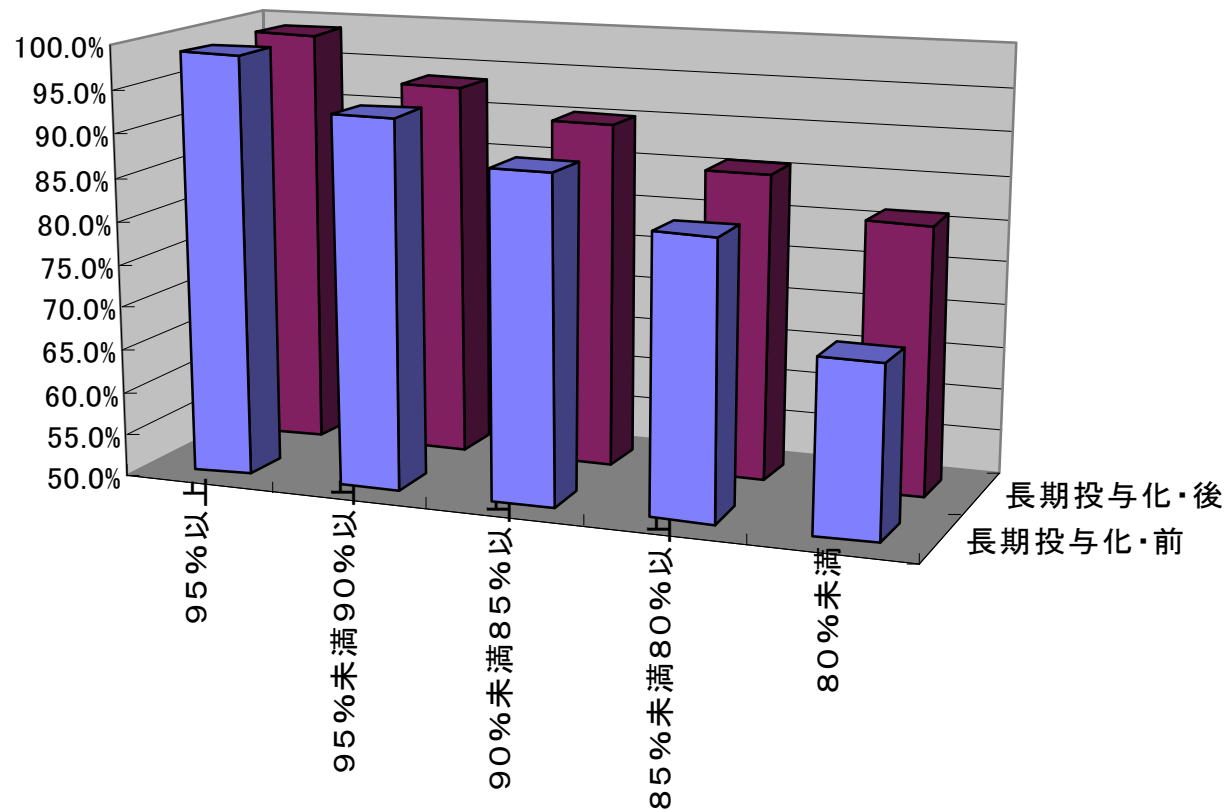
- 長期投与・前は男女差がかなりあったが、長期投与後はかなり縮まっている

### 3 結果 — 3 長期投与・前のコンプライアンス群別①



- ほぼ同じ症例数に分けられる95%で区切ると  
95%未満の群では長期化・後、実に5%以上改善している

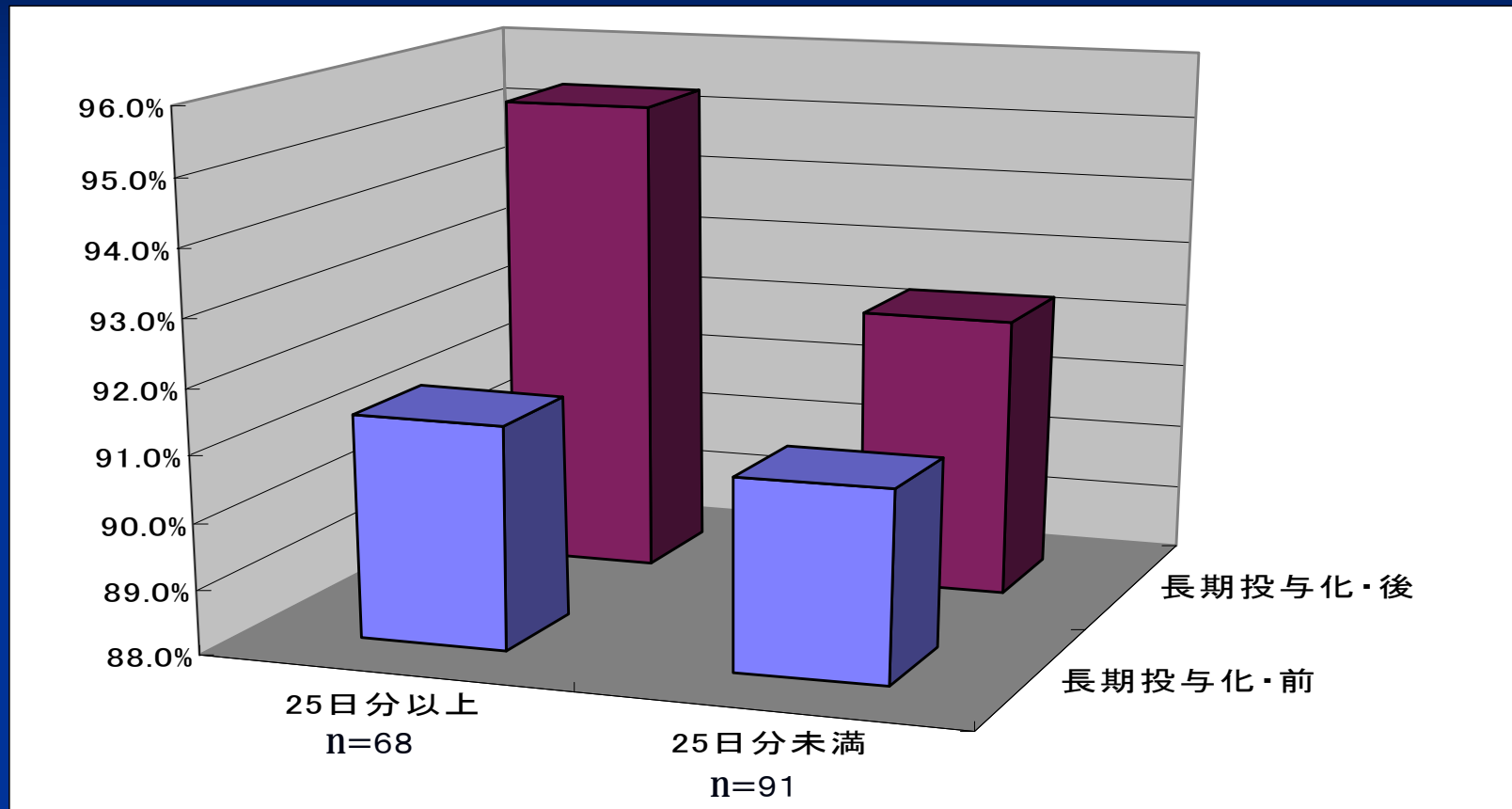
### 3結果 — 4長期投与・前のコンプライアンス群別②



- 95%未満の群をさらに細分化すると、よりコンプライアンスの低かった群ほど長期投与化・後に大きく改善している

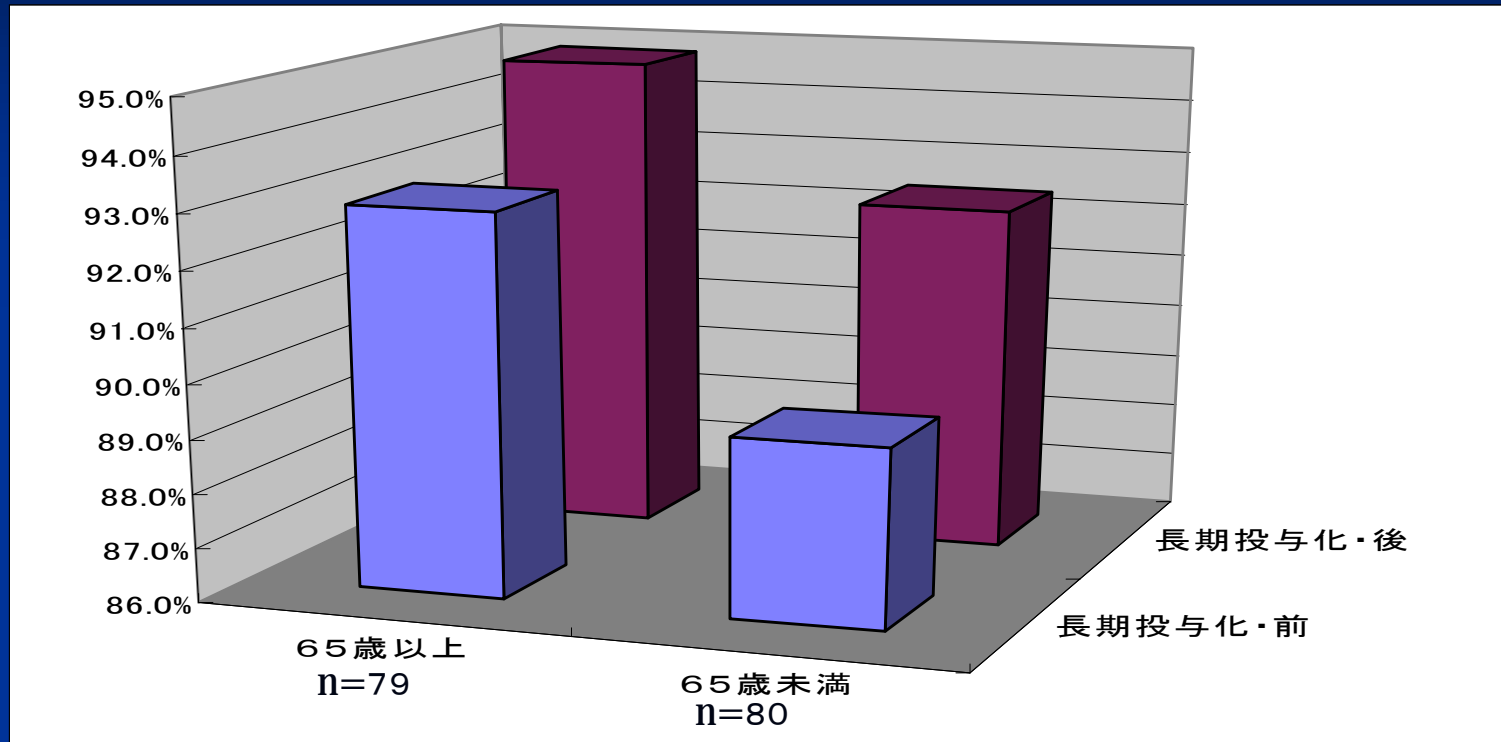


### 3 結果一5 長期投与化・後の平均投与日数



- 実際の長期処方とは21日分と28日分が殆どであった
- 中間の25日で分けてみると、より長期に処方された群の方がコンプライアンスが高くなっている

### 3 結果－6 年齢別



- 65歳以上の高齢者もコンプライアンスがもともと高いこともあるが  
65歳未満の改善が顕著である
- 長期化・後の65歳未満のコンプライアンスは、長期化・前の高齢者の  
コンプライアンスとほぼ同じになる

## 4 考察

- 長期投与によりコンプライアンスは改善する傾向にある
- 特にもともとコンプライアンスの低い症例や非高齢者、男性であるという条件の場合に顕著に改善する傾向にある
- 処方日数はある程度長め(21日処方より28日処方?)の方が改善する傾向にある

## 5 まとめ

- 長期投与化により「便宜性」が増すことでノンコンプライアンスが改善した症例が多いことが予想された。
- しかしながら、来局間隔が長くなることから服薬指導の機会も減り、副作用を含む情報提供にもタイムラグが発生し、リスクも増大する
- 機会の減った服薬指導1回あたりの重要性も増すが、今後は長期投薬情報提供や基準調剤に伴う夜間の問い合わせの対応などの様に、窓口の投薬に伴わないサービスの充実が「かかりつけ薬局(薬剤師)」として益々重要になってくることが予想される。